

炭 俵

梅が香の巻

— 詩情と技法の両面からの鑑賞 —

浪 本 澤 一

むめがゝにのつと日の出る山路かな

芭蕉

出ている。

景気の発句。

○むめがゝに 古来、梅に限って、梅の香と言わず、梅が香と慣用する。「に」は、その下に「招かれて」のごとき語を含む。「梅」は、早春余寒の節の花。春季。

梅の花が清香を放つ、その香に招かれて、朝日がのつとばかり大らかな姿を表わす、早春余寒の頃の山路よ。

この発句に現われている季節は如月の初め頃で、その頃の山路の景趣をいかにもおもしろく詠んでいる。支考の『笈日記』下巻に「梅が香の朝日は余寒なるべし」とあるので、その季節感は尽されていよう。ただしこの発句の表出は近代俳句の写生とはいささか趣きを異にしている。

あたかも梅が香に招かれて朝日のにわか射し出るとく表現したところ、一句の曲節であって、それがやがて俳諧のおかしみである。朝日の昇るを形容した「のつと」の俗語は門下の間に話題を呼んだものであって、この場合「ぬつと」では悠揚とした感が損じられるし、句品も一段下がって聞える。「のつと」の研かれた俗語の活用に芭蕉の詩的感覚の鋭さが汲みとられ、この俗談平話の表出におのずと『炭俵』の軽みも

処くに雉子の啼たつ

野坡

○雉子 留鳥であるが、古来春季とする。敏捷な鳥で、姿にも声にも別趣のたくまじさが感じられる。

発句の山路に、その場の景気をうち添えた脇句。間近かな叢から出し抜けに雉子が啼きたつ。と見るや、向うの叢からも相繼いで啼きたつ、といった光景であって、その場を活写した見事な脇である。「のつと日の出る」に「雉子の啼たつ」の語勢の呼応は響きの感合となっている。角齋月居の「俳諧道の便」に「是発句に場も時分も出でたる故時節を合せたるなり。雉子の鳴たつ日の出を思ふべし」とある。

景気の打添。

家普請を春のてすきにとり付て

全

○家普請 家の建築。○とり付て とりかかって。

第三は一転の格。雉子の啼きたつというより情を起して、家普請と趣向を定め、春のてすきと、その時節を整えた。農家の暇な正月末、二月初めごろを見計って取りかかる普請である。

幻想湖中の『鶯羽集』に、この第三を「杉形」と言っているのは、第三句作二法の太山句法に対する杉形句法という意である。即ち、「家普請を取付きて」と作って、後に中七文字「春のてすきに」と入る、かかる平句と違う句法についての注意である。なお第三における「家普請を取付きて」の助詞「を」の用法は俳諧独特のもので、規範文法からすれば、「に」とあるべきところ。

起情。

上のたよりにあがる米の値

芭蕉

○上のたより「上」は、上方かみかた。徳川時代大阪堂島の米市の取引が全国の米相場を左右した。

家普請を春のてすきにとあるより転じて、米の値上りの趣向を軽くあしらった付け。上のたよりは一句の作。農家のよろこぶさまである。

会釈。

宵の内はらくとせし月の雲

全

○はらくとせし 雨のばらついた意。「はらくと銭落したる石の上 俗水」(深川集)

○月の雲 月の面を雲の去来するにいう。「月」で秋季。表五句目は月の定座。

あがる米の値とあるより転じて、陰晴定まらぬ秋の日癖を思い寄せた。上方筋の米の値上りは二十日前後の暴風雨によるとして、その余波程度の天象をあしらった付け。前句によく見合った上手な付けである。

天象。

藪越はなすあきのさびしき

野坡

○藪越はなす 小藪を隔てて高声に立ち話しをするをいう。

「宵の内はらはらとせし」というより、「藪越はなす」と、その場の趣向を定め、「月の雲」の余情を取って、「あきのさびしき」と時節を合わせた。「巴拉トセシ語ニ藪ノヒビキ有リ」(秘註)。この付け、「藪越はなす」に場も人情もあるが、「秋のさびしき」を詮せんにした時節の付けと見てよい。

時節。

御頭へ菊もらはるゝめいわくさ

野坡

○御頭 親方と頼む人。○菊 秋季。

藪越はなすという位を見込み、下級の士の住む場末のわびしい屋敷町などのさまを思い寄せた。同心衆の住む組屋敷などで、御頭は組頭といった人であろう。春からの丹精を御頭の一言で無にしてしまったという余情を見せた句である。

起情。

娘を堅う人にあはせぬ

芭蕉

ことは雨のふらぬ六月

芭蕉

○娘 年頃の娘。

菊もらはるる迷惑さという詞を咎めて、万事に物堅い老人を思い寄せた付け。江戸時代、菊は広く都人に愛でられた花。「菊」の匂いを奪つて、「娘」と趣向を定め、こればかりは秘蔵するとの句作りである。封建社会は権力の横行の前に個人の意志が無残に踏みじられた社会である。小身のご仁が、対人関係には格別に気をつかつて、娘を秘蔵する気持には共感させられるものがある。

其人。(むざともられるを迷惑がる、其人)

奈良がよひおなじつらなる細基手

野坡

○奈良がよひ 小商人が奈良に商品の仕入に往復するをいう。○おなじつら 同列。○細基手 細元手。

娘を堅うあはせぬというを分に過ぎたことと見直して、その人のさまを他から見た付け。

奈良晒布など買い出しに通う小商人の群れであろう。その仲間の一人が、娘を分不相応に大事にするのを、同業者の間で苦々しく思い、噂するさまの付け。前句に繋いでこの句を恋と見るにはやはり問題が残る。前句から当然汲みとつてよい恋の情をはぐらかして付けているように思われる。芭蕉も、この付句を恋に扱うには、何となく物足りぬ気がして、一卷の最後(名残裏、五句目・六句目)に恋を出したのではなからうか。

其人(他からの噂にして付けた)

炭 俵 梅が香の巻

○六月 陰曆六月。

年々の奈良通いと見て、その年の時候をあしらった付け。細元手というに、道中の暑気を寄せて、渡世の辛さを言外の余情としている。人情の句の連綿を離れるため、時候をもって、軽く付け放し、一段落を与えた一句。

遣句。

預けたるみそとりにやる向河岸

野坡

○向河岸 ここはただ対岸という意。

雨の降らぬ六月というを、出水の危険も去ったと見て、対岸にある高みの家に預けた味噌を取りにやると付けた。庶民の日常生活に欠かせぬ味噌の趣向を定めたところが『炭俵』の俳諧である。

起情。

ひたといひ出すお袋の事

芭蕉

○ひたと 隔てなく。○お袋 母という意の俗語。

味噌の用を年回の客設けなど見て、故人の思い出を語るさまを寄せた。味噌の使いの息子、あるいは使用人などを迎えて、対岸の老女などが、今は亡き母者のことをいかにも感にたえぬごとく、情愛をこめて語り出すというのである。

向付。(味噌の使いに別人を対させた)

『評註』に「此句につけて人に聞きけることあり。此前に御頭へといふ事ありて、又御袋といふ事いかならむと翁に尋ねけるに、翁曰く、御袋より猶よき事あらばかへよ、もしかへがたくば此巻の見落しにしておけといはれしよし。尊むべし、仰ぐべし。翁の俳諧を捌ける、河海の細流を扱はずといはむか。指合線といはれむより上手といはれよといふも、俳諧の金言也。此事をしらざるものはただ指合のみにかかりて、俳諧の去嫌にあらざる事をしらず。翁のこのことばを紳せうに記すべし。」とある。

終宵よゆう尼の持病を押へける

野 坡

○終宵 一晚中。○押へける 「ける」は意を余して連体形とした。

ひたといひ出すというを差し迫つてのことと見て、その人の用を老尼の上とした付け。前句の「お袋」とあるに「尼」と趣向を定め、「ひたといひ出す」とあるに「持病を押へける」と句作りした。一句の調べといい、前句との感合といい、さすがに申し分がない。物語の一節を連想させるような懐ふとろの広い付合である。——在家の娘が知音の老尼に伴われて物詣をする途中、宿か船中の出来事と見られる。尼が持病の発作でひどく苦しみ出し、とうとう一晚中身体をさすつてやる事態に立ち至ったとの意。「旅にして慕ふさま、存命の人にかへたり」（古集弁）其人。

こんにやくばかりのこる名月

芭 蕉

○こんにやく 煮物のこんにやく。「こんにやくのさしみもすこし梅の花 芭蕉」○名月 中秋の名月をいう。

芭蕉とその一門の連句は形式的な定座の位置にこだわらないが、一応裏八句目（後七句目）が月の定座とされており、芭蕉七部集も初裏の月は八句目に出ている例が比較的によく十一句を数える。七句目に月の出ている例は『ひさご』の「角大師の巻」の一句に過ぎない。

あやにくに尼の持病とあるより転じて、その寺での月見の宴を思い寄せた付け。月すでにいたく傾き、こんにやくばかり食べ残されているというので、尼の看病のため月見の宴に洩れた趣を余情としている。人情の句のねばりをゆるめるため、天象でもって、そこを離れ、一段落を与えた一句。

遣句。

はつ雁かりに乗懸のりかけ下地敷したぢして見る

野 坡

○はつ雁 初めて北から渡来してくる雁。秋季。○乗懸下地 「乗懸」は、馬に荷をつけて人も亦騎るをいう。「下地は」、鞍の上に敷く薄いふとん。

こんにやくばかりのこる名月というに、暁の景色のあるより転じて、旅立を思い寄せた付け。夜明前の空はまだしばらくは暗く、西に振った月の光が澄み透っている。おりから初雁が音の渡るを聞いて、それを機にいざ立たんと乗掛馬に下地の準備を整えるさまである。

起情。

露を相手に居合ひとぬき

芭 蕉

○露 ただ露とあれば秋季。○居合 居ながら自在に刀を抜いて敵を切る技。「寒さしさうて足のさきまで 信章」居あひぬき霰の玉や乱すらん 信徳」(延宝六年刊、江戸三吟) 主人の馬支度をする剃下奴と見て、わざくれの居合抜を寄せた付け。「露」は、前句に時節を合わせたものであるが、おそろしい居合の相手にはかない露の着想はすこぶる奇である。「居あひぬき霰の玉や乱すらん」からの脱化と見られるが、談林俳諧のさわがしさを蕉風の洒脱な味に純化している。

其人。

この付句の切案は「露を相手に」ではなかったという。『七部搜』

(吏登口述・蓼太識)に「道具屋三郎兵衛、芭蕉翁の真蹟一軸持參、師一覽、一段見事也と誉め給ふ。是島田の駅より杉風方への書翰なり。端書に、予が居合一抜の句、露を相手にと御直し可給候、くれぐれ野坡へ御伝へ頼み入り候、師歎息して、古人の骨をらるる事見るべし。是は炭俵集出版の頃、翁旅立たれた事序文にあれば、其時の文通也。五十里がうち此七文字を案じられたと見えた、泪の落つる事なり。」とある。「梅が香の巻」は元禄七年春の興行。『炭俵』の刊行は同年六月二十八日であり、芭蕉は、それに先立って、同年五月八日江戸を立ち、十五日島田に着き、塚本如舟の家に迎えられている。

町衆のつらりと酔て花の陰

野坡

○町衆 花陰を占めるといふ一句の位から見て、町方の旦那衆という程の意に解しておけばよい。○花の陰 桜の花の下陰。初裏十一句目。花の定座。

芸人の居合抜と見立を直し、花見の場を思い寄せた付け。そちらの空

炭俵 梅が香の巻

地では芸人が人寄せの居合抜を演じており、こちらの花陰では町方の旦那衆が一樣に酔顔を並べて上機嫌であるとの意。前句の「露」は、四季を通じてあるものゆえ、「花の陰」と、季を春に移している。

向付。(町衆を居合抜の人物に対させた)

門で押るゝ壬生の念仏

芭蕉

○壬生の念仏 壬生寺は京都の西郊四条大宮にあつて、地藏菩薩を本尊とする。毎年陰曆三月十四日から二十四日まで大念仏法会を修し、土地の人が役者となって壬生狂言を演じる。田案に類した所作だけの無言劇。春季。(今は狂言の期間を四月二十一日から五月中旬までとしている)

前句の場を壬生大念仏法会の日思い寄せた付け。花の懸茶屋に寛ぐ町方の旦那衆とは異なり、在所の百姓などが、寺門のあたりで、揉み合ひ、押し合ひしているさまの付句である。

前句の「つらりと酔うて」の動的なリズムに乗って、「門で押るる」と動的なリズムの付けをしている点が注目される。謂わゆる芭風の匂いを根底においた響きの感合である。もつとも、この付合のみならず、次の付合についても同様のことが言えるわけで、広く言えば、この巻全体を通じて、芭蕉と野坡の間然するところのない、巧者の付合が連綿されているのである。

其場。

東風々に糞のいきれを吹まはし

全

○東風々 ちち。「月令」に「孟春之月、東風解氷」とある。立春とともに吹く風をいう。春風。

門で押さるとあるより転じて、その時節をあしらった付け。当時壬生寺は洛外の田圃の中にあり、東風の吹く頃になると、糞のいきれが寺門のあたりまで臭ってきたものと見える。「門で押さるる」に蒸すような煩わしさを感じとって、「糞のいきれ」と句作りしたのである。糞尿のような特異な取材を扱っても、句品を損ぜぬよう、その場の野趣をさらりと懐しく言いとつてところが蕉風の俳諧である。

時節。

たぐ居るまゝに 肱わづらふ

野 坡

○肱わづらふ 風疾の類で、腕の痛む空手、あるいは打身の後遺症を病むのであろう。

東風々に糞のいきれとあるより転じて、百姓がその頃の農間に空手などを病むと付けた。ふだん働き馴れた身がたまたま隙でいると、かえって身体の節々の痛くなったりするものである。打身なども特に春先の陽気の変り目におこりやすい。

起情。

江戸の左右むかひの亭主登られて

芭 蕉

○江戸の左右 江戸の様子。○登られて 昔は京を中心として、地方から京に向かうを上ると言った。江戸から京に帰られての意。

肱わづらふというを京の商人と見立て、同業の向い家の亭主から江戸の様子を聞くさまを思い寄せた付け。ただ居るままにの語に、様子待ちの、不安なものを汲みとつて、江戸の左右を聞くと句作りしたのである。

向付。

こちにもいれどから 白をかす

野 坡

○から白 米を精げるための踏臼で、屋内の庭に据えつけになっている。「かす」は、その家のから臼で搗かせるの意。

向い家の亭主が旅先から帰られてというより、白の用に今日の人情を見せた付け。隣の女房が臼を借りに来たのに対して、当方も入用であるが、こころよく立て替えるという意。女房同志の情愛を向かわせた付けである。

向付。

方々に 十夜の内のかねの音

芭 蕉

○十夜 陰曆十月五日から十四日まで十日間、毎夜浄土宗の寺院や檀家で別事念仏を勤めるをいう。「下京の果のはてまで十夜かな 許六」○かね 念仏の鉦。

こちにもいれどとあるより、臼の忙がしい時節をあしらった。十夜の仏事行われる陰曆十月はもう冬の寒みの身にしむ時節である。京の町がしんと静まりかえっている夜、小寺・藪寺・信徒の家々からいつまでも念仏の鉦の音がさみしく聞えてくる。京の町も下京あたりの小家であれば、その佗びしさはまた格別である。それは芭蕉の愛したいかにも庶民的な詩の世界である。

時節。

桐の木高く月さゆる也

野 坡

○月さゆる 月がきらきら光って寒げなさま。冬季

十夜の鉦とあるより、その時分の景色をあしらった付け。「月さゆる」

は十夜の鉦の寒みから呼び出された趣向であって、「桐の木高く」は一
句の作。名残表の月は十一句目が定座であるが、前句の詩趣に誘われて
五句も引き上げられている。野坡はまた蕉門の旗頭であって、この付句
には詩魂が入っている。

時分。

門かどしめてだまつてねたる面白さ

芭蕉

○門しめて ここの「門」は「かど」と訓む。伊藤正雄氏の『梅が香の巻』要解に「門かど口
をとさす意で、実際の門の有無に関係がない」とあるを採る。

桐の木高く寒月のさゆるといふに孤高の姿あるを感じとって、隠逸の
人を思い寄せた。土芳とほうの『三冊子』に「この事先師の曰く、炭俵は、門
しめての一句に腰をすえたり」とあるように、当時における芭蕉の胸中
をのぞかせた付句である。実感を写実した平明な句作りに芭蕉晩年の軽
みを見せている。

起情。

ひらひらふた金で表がへする

野坡

○表がへ 畳の表替。

だまつてねたるというより、下賤な男のさまを翻転して付けた。連句
は変化を尊ぶ。超俗の人物をごく下賤な人物に転じた、打越からの変化
の鮮やかさにこの付句の感味のすべてがある。即ち、「おもしろさ」の
詞に、ひそかによるこぶ情のみえるところから、拾い金の趣向を定め、
その下劣なさまを余情にみせた句である。

炭俵 梅が香の巻

この付句の卑俗性を非難する批評は、個人の主観に発想の基調を置く
発句と連衆の協調という客観的立場に立脚点を置く連句、この両者の性
格を混同している所から起っているものであって、当を得た批評とは言い
がたい。発句は作者の人格の直接の投影と見るべき叙情詩としての性格
を持つが、連句は、作者の主観を離脱して、広く世態人情の連綿を行な
う叙事詩としての性格を帯びてくる。この場の付句は、打越の孤高から
離れて、際やかな変化を呼ぶべく下層庶民の人情を写実したと見て鑑賞
すべきである。一句の体は、からつとした軽味を行なっているので、さ
して厭味には聞えない。

其人。

ははつ午うまに女房のおやこ振舞ふるまて

芭蕉

○はつ午 二月上の午の日。この日は吉日とせられ、稻荷詣りで賑わう。春季。○おやこ
親類の意。近松「大身の武家に親子もあるぞいの」（夕霧阿波鳴渡）

表がへするといふ客待ちの体あるより転じて、はつ午と趣向を定め、
それも拾い金であるゆえ、他人には沙汰せず、女房の親類だけを招くと
句作りした。下層庶民の人情を余情に見せた付けである。

其人。（客待ちの人を他から見た付け）

又このはるも済すまぬ牢人

野坡

○済ぬ 主家への帰参がかなわない。○牢人 主家との縁が絶えて、秩禄を失った武士の
意。浪人と同じ。

初午の、それもごく内輪の振舞というより、それを目当の浪人をあし

らった付け。一句の体は前句に突き放して付けている。この浪人、招かれてのことではなく、招かれざる客としてやって来たもののようにある。『秘註』に「其振廻ヲ見込テキタル浪人也」とある。この古注の所見、言簡にして要を得ている。尾羽うち枯した浪人のやり場のない、寂然たる気持を余情に見せた付けである。ごく内輪の振舞というに、日陰暮しの浪人、——どこかわびしい、ひっそりとした気分でつながっている。そこが蕉風の「匂い」の感合である。付け方は、初午の振舞の場に浪人をあしらった付けである。

会釈。

この付句については古来異説さまざまである。近代以降のもので、比較的目につきやすい二、三の説を挙げておこう。

「女房の里の隠居及び当主を振舞ひて、度々ながらと借金の頼みをかゝるとも解され、又浪人親子の嫁いりさせた娘の縁に引かれて饗応を受けつつ、此春も猶婦参叶はずと歎ずるさまにも解され、異解さまざまあるべし。中に就て初の解のかた世態人情の上にかけてをかしかるべし。」(炭俵 続猿蓑抄)

以上の説の前解は、三句のわたりが、中の句をはさんで扉付になる。即ち、打越と前句は拾い金の男が「女房の親子」を振舞い、前句と付句は、牢人が「女房の親子」を振舞うとなり、中の句をはさんで同趣向に落ち入る。謂わゆる観音開きとして嫌うのである。むしろ付筋からすれば、おもしろくないとされている後の解の方が自然である。

「又とあるから、先春も浪人、この春にこそはと望をつないで居たのに、またこの春にも芽が出ないといふのである。その尾羽うちからした淋しさを慰めるために、好運を祈る初午の日に、その浪人親子を、婿が振舞ったものであらう。付味は「うつり」と見るべく、季は春である。」(蕉風連句講義)

この解は能勢朝次の解であるが、前に挙げた露伴学人の後解と同様である。打越から離れ、牢人という別人を表わしたということでも多少の變化と展開はある。が、前句に付きすぎて意味付の嫌がある。なお両者の解は「親子」の意を誤解している。

「極く内輪だけの初午の振舞いというところに、物のたらぬ不自由の余情がある。それを牢人と趣向し、義理堅く婦参を待機していると句作した付。 (芭蕉句集 連句篇)

蕉風連句の懐は広いゆえ、さまざまの見解が入れられて良いわけであり、そこに象徴詩を味読すると同根の世界があるのだが、この付合は、前句も付句も人情の付けであるゆえ、世態人情の機微に触れて来なければ地に着いた解にならない。上に掲げた解は、実作者の付意からは懸け離れた、窮した上の解である。

法印の湯治を送る花ざかり

芭蕉

○法印 近世において、山伏や修験者のその土地に土着した者を俗間で法印と称した。

○湯治 式目の上で、湯治は病体に入れるが、この付けなど養生のため温泉に遊ぶという程度に解しておけばよい。

済まぬ浪人とあるより転じて、法印の湯治に行く、その留守居を思い

寄せた付けである。「ただ何といふ事もなき付合なるべけれど、何やらおぼめかしたるなり。前句はゆえあつて浪人したる人の、此春もまだすまず、法師などのせわになりゐるとの付合なるべし（評註）」

其人。

本来ここは月の座であるが、すでに五句前に引き上げて出したので、花も自然に上つてきたのである。名残裏五句目に花のないところからみて、その句いの花をここに上げて出したと見られる。名残裏五句目の花の動いている例は比較的に少ないのであるが、それを動かしている。因に、「初午」とあつて、ここに「法印」とある。『梅林茶談』は、この点に触れて、「今の弊風に神祇釈教の打越を堅く禁ずれども、蕉門にては禁ずることなし」と、去嫌における蕉門の寛制を説いている。

なは手を下りて青麦の出来

野坡

○なは手 田間のあぜ路。○青麦 青々とした春の麦。春季。

湯治を送る花ざかりとあるより、その時節をあしらつた付け。前句の花ざかりを受けて、青麦の出来と趣向を定め、法印の湯治を送るといふに、暇手を下りてと句作りしている。「時節ノ会積ニシテ其儘ナル体ヲ言ヘリ」（秘註）また「前句撃の花なれば揚句の心にて作りたるが故に軽し」（薦羽集）

時節。

どの家も東の方に窓をあけ

野坡

炭 俵 梅が香の巻

○東の方に 春風である東風の吹く、その方角。

青麦の出来よろしとあるより転じて、村落のさまを思い寄せた付け。「伝曰、前句は麦の出来よろしきさまなれば、其村は皆東窓によるづ日請よき所と其場を定る也」（二弟準繩）」

其場。

魚に喰あくはまの雑水

芭蕉

○雑水 雑炊。俗に、おじや。

東の方に窓をあけというより転じて、その場を浜と定め、滞留客の人情を思い寄せた付け。その場を転じただけの句とせず、「魚に喰あく」と、人情を尽しているのが巧緻。

起情。

千どり啼一夜／＼に寒うなり

野坡

○千どり 夜など磯辺に散り飛び、さみしげに啼く。古来冬季とする。

魚に喰あくというを流浪の人と見て、季節の推移をあしらつた付け。冬の深まりゆくさまが千鳥啼くの語に一入哀れに感じられる。句体の優しみからして、海辺の町にさすらい寄つた、着た切り雀の、旅芸人などを余情に見るもまたおもしろいであろう。

時節。

未進の高のはてぬ算用

芭蕉

○未進の高 年貢未納の額。○はてぬ 決済がつかない。

一夜一夜に寒うなりというより、一夜々々に心をとめる人の上に思い寄せた付け。名主が、公儀末進の上納米額の割当をしているが、一向に埒があかず難渋しているさまである。

起情。

隣へも知らせず嫁をつれて来て

野 坡

○嫁 妻として迎える女。智に対していう。

未進の高のはてぬというより、貧農の上と見直し、世間を憚って、隣へも知らせず、内々に嫁取するさまを付けた。ここは句の花の定座であるが、すでに花をひき上げて出したので、形は雑の句として捌き、嫁に花嫁の意を響かせて、挙句を迎える姿勢を整えた句である。

其人。

屏風の陰にみゆるくはし盆

芭 蕉

○くはし盆 菓子を盛った盆。

隣へも知らせずというに忍ぶ体あると見て、ごく内輪の婚礼のさまを「屏風の陰にみゆるくはし盆」に象徴させた付けである。「此二句に人情世態をつくせりというべし。小家住のものなどの、隣人にも知らせずこっそりと嫁をつれて来たる也。後句は客などあるやうすにて、料理などするを、隣り近所の人の何事ならむとさしのぞけば、屏風引きまはしたるかげに、菓子盆の見ゆるに、さては婚礼にてありしよとささやくさま也。翁、隠逸の身にてかかる事などみつけおかれはいぶかしき事

也。すべて俳諧は第一人情世態にわたらざれば、あはれなる事、をかしき事をいひ出づる事かたし。」(評註)とあるので、句趣の大様は尽されていよう。ある書に、本膳がなく、盛り菓子だけの婚礼とあるが、それでは句面だけの、まことに殺風景きわまる解になる。いかに小家住みの貧農でも、内輪ながらに酒のくめんはもとより、本膳の真似事ぐらいはするのが人情というものであろう。菓子盆は接待用であって、それが屏風の陰に見えるとだけいったところに、その場のいかにもひっそりとした気分が出ている。「忍ブ形アルヲ付句ニ移シタリ」(秘註)とあるのが句趣的を射ている。世態人情の侘びを尽した付合である。

屏風は器材で恋の詞ではないが、引廻した屏風の陰に灯火が明かり、一句のうち何となく艶な気分も汲みとられる。前句につないで恋の句と見るべきである。一巻の首尾の上からして、最後の二句、格別に力のかもった句作りをしている。

其場。

〔付言〕 『炭俵』の巻頭に芭蕉と野坡の両吟歌仙「梅が香の巻」の掲げられているのは、この巻にそれだけの価値があつたことである。芭蕉の指導を受けた『炭俵』の連衆の中では野坡が最もすぐれている。この歌仙は、芭蕉と野坡が日頃の技を自在に示した巻と見え、きわめて完成度の高い一集となっている。曲斎が『婆心録』に「この巻、野坡が仕損じある故に第二に落ちしを、世人炭俵中の出来物と評するは、只巻

頭を思うて句々を味はひ得ぬ故也。」と評しているのは、むしろ偏見に因る独断であつて、首肯させるに足る公平な論評ではない。世論が「炭俵中の出来物」と認めていた如く、巻頭に据えるに値する芸術的完成度の高い一巻である。

主要参考書

- | | |
|----------|-------|
| 七部搜 | 吏登口述 |
| 俳諧古集之弁 | 葛松子杜哉 |
| 秘註俳諧七部集 | 伝 暁台 |
| 本文略称『秘註』 | |
| 芭蕉翁付合集評註 | 佐野石兮 |
| 本文略称『評註』 | |
| 俳諧 鳶羽集 | 幻窓湖中 |
| 七部 婆心録 | 原田曲斎 |
| 俳諧 或問 | 石河積翠 |
| 七名八躰付合要録 | 菅 梅人 |
| 付合手引蔓 | 夜半亭几董 |
| 連句自他の事 | 加舎白雄 |
| 梅林茶談 | 桜井梅室撰 |
| 二弟準繩 | 門人九起記 |
| | 摩訶珪山編 |